

女學校  
用讀本

源氏物語拔華

桐壺

一





の女あり夫ハ左衛門権佐原宣孝朝臣を産後長保三年四月とつふ宣孝卒られりやも四五年をりやもめぢみして寛弘二年の比より上東門院へ宮づりへよ出られたるよしんそのやもめぢみのうち物語をつくりぬといふ説もあり或ハまづうへたるとき上東門院ふりの位よりいかけらるるともいへり

はじめふりられたと思ひあがりつる所あり。めさほしきものよおとめをぬき給おれど。それよを下らうの交配ごちい。ましやまのうら。あさゆふの書つづりよつけても。人の心をうごあし。うらみをあふはかりあやありらむ。いとあつちくるをゆき。あのかほをげよ。さとあちなる代。いれくあつたあをれするものよあほし。人乃そ。心をかえは。い。せ。あ。い。世のためしよなりぬべき所も。て。る。な。う。ん。ぢ。あ。め。う。人。な。とも。あ。ひ。な。

一十一号

桐壺 さくば巻ハ源氏の本傳多れど第一大段はまづ更衣の傳を挙げたるハその系圖を著しあり。第二大段は帝の御く更衣を惜しむふさまハ、その所寵愛の情の句宛は若君よおよぶべき結構あり。第三大段は容貌のまづれたるさまを挙げ、吳玉の高麗の人さへも驚きたる状を叙べ、第四大段はありてハ、始に所心のやさしき状を説き、次に所遊戯の状を挙るハ是

い。め。我。を。ば。め。づ。い。と。ま。ば。ゆ。き。人。の。所。愛。せ。なり。も。ろ。う。も。あ。う。る。と。の。あ。と。ま。よ。こ。せ。世。も。も。づ。れ。あ。う。り。を。れ。と。や。う。く。あ。め。れ。志。い。よ。か。あ。ぢ。き。な。う。人。の。か。や。な。や。い。く。さ。よ。な。り。て。揚。子。妃。の。あ。め。し。も。む。き。い。で。は。げ。う。な。ま。ゆ。く。よ。い。し。た。な。き。こと。お。ほ。あ。れ。ど。う。と。け。る。を。所。心。な。く。の。と。づ。ひ。る。妃。を。と。の。こ。よ。て。ま。ど。ら。ひ。の。ふ。衣。の。身。上。は。係。ふ。小。序。よ。し。て。そ。も。く。帝。の。所。寵。愛。の。姫。の。状。を。説。き。出。せ。ま。○引。れ。と。と。系。を。ハ。寵。を。ゆ。ん。と。思。ふ。○別。の。弘。徽。殿。の。女。所。を。と。を。さ。れ。○め。ざ。よ。し。き。冷。眼。ら。し。き。○別。外。は。と。更衣。と。同。馬。の。人。を。い。ふ。○あ。う。し。き。

源氏物語

きりぎりす

二



更衣を追悼しめふ  
ことのみ成やうく  
一小説に於てい、更  
衣の御葬式のさま  
母北の方の御歎き  
帝の御歎きの状を  
叙し、二小説に於て  
ハ、鞍員の命婦を御  
使として、更衣の亡  
きあとの宿を訪え  
せたまふこと、母北  
の方のありさま、帝  
の御歎きの漸く切  
なるをのべ、三小説  
に於てハ、鞍員の命  
婦の復命のこと、帝  
楊貴妃の例を思ひ  
ふまひて、甚歎き、  
ふ状を叙べたるふ。

いつしあともむとあるのうせめて。いそぎまぬ  
らせ<sup>帝の若さを</sup>御覽だるよ。免づこのぬるちごの御う  
ちなり。<sup>朱雀院</sup>一のみくら。右大玉の女<sup>あうご</sup>御の御はうよ  
て。よせおわくうごひる死すけのきみと  
世もわさうづきすゆれど。<sup>源氏の女</sup>けはよ原ひよは。  
さうびのふづくもあうざりけれバ。おほのこ  
の御んどねき御おひよそ。<sup>源氏の女</sup>このきみをば。  
かゝしものよおぼくち志づきめるとあきまな  
ハ二小説の第三節を。帝更衣と若君とを鍾  
愛志のふよ因て。弘徽殿の嫉妬の恨を受ぬ  
ふ始となる状を見り。たを。○引あうせよ、衣を  
系内せしめて。○一のみこい朱雀院。○右大玉の女

結尾よこの御事よ  
ふゆたををハ道  
理をもうするをせ  
ゆひ云云とあるよ  
て、帝の御歎きの極  
度なること歎あら  
せよ、次よ才三大  
段を、君の上の御  
とあり、叙したる。  
一小説に、あえ奉  
内、帝御愛のさま  
をのべ、二小説にハ  
高麗人觀相のしを  
奉り、後よ太上天皇  
とあり、伏案を  
あめ、たを、さして三  
小説に、藤壺の中侍  
する、帝更衣をの  
なる、みのふて、その  
状を、あうして、さ

御ハ。弘徽殿。○引せあも。ハ。寄重。外戚の威重き  
○引けのきみ。ハ。春宮。○例よ。はひよ。心。宮。包。の。美  
る。○引く。ハ。の。ハ。ト。けり。る。ぬ。さ。よ。私  
よ。人。め。ほ。う。ハ。愛。さ。ま。ハ。実。の。鍾。愛。る。  
更衣  
せ。め。ま。ま。あ。さ。る。て。の。う。ハ。ま。つ。の。ハ。ハ。後  
べき死ハ。ま。あ。さ。る。さ。き。お。母。を。い。と。や。む。ご  
と。さ。く。上。ぎ。め。の。ハ。け。れ。ど。さ。さ。る。く。ま。つ。を。さ  
せ。給。あ。ま。り。ふ。さ。る。ぐ。き。御。あ。そ。び。の。を。御。さ  
よ。と。よ。も。ゆ。急。ある。こ。の。あ。し。ぐ。ま。ハ。ま。が。ま  
う。の。ぼ。う。せ。の。ふ。あ。る。時。ハ。ハ。あ。御。と。の。ご。ま。り  
は。ぐ。て。や。が。て。さ。あ。う。を。せ。給。さ。ど。あ。る。が。ち  
よ。お。ま。へ。さ。さ。び。も。て。な。ま。を。の。ひ。程。よ。あ。の

後壺のこころはかき  
りぬせも才四大段  
ハ、らぬも若君の上  
の事よそ二なる  
手づ元服のこころ  
よ姑りて所婚烟の  
こころ、所殿位の事よ  
ある、二小段と云、一  
小段よ於てハ、その  
所元服の事より、次  
よ所婚礼のこころ、所  
奉て、さて尤大玉殿  
の方へ、さうさうせう  
ふとす侍を叙し、二  
小段よ於てハ、若君  
の所性質及び所遊  
戯のさほ、并ニ大殿  
修理のこころ、所叙  
べて、尤大玉殿の所  
注さの状を志めし

つろろろきこうもみせしを。源氏の若君  
まれほひてのちハ、いと心よあもほしあき  
てたれむ。坊春宮もようせはハ、このみこのみ  
づきなめり。と一のみこの女、ハあはれ、  
かへし。一小段の才四節を叙。前へ立ゆりて。更  
の恨を受くべき伏案の才二なり。ハ弘徽殿  
尚侍内侍の類なり。ハ朝夕よ所前よ伺候する。  
ハコトワリナクハ。ハ引つらさハ纏りさしめ  
ハ引つらさハ然あるべきハ。ハ引つらさハ節ハ  
ハ引つらさハ強ハ。ハ引つらさハ能くせ  
ハ引つらさハ一のみこの女、ハ弘徽殿の女、ハ  
ハ引つらさハ弘徽殿の女、ハ弘徽殿の女、ハ

二号一

ては若の結尾とせ  
る君といふ名ハ、こ  
まふどのめをせえ  
て、つけをさうと  
ぞつひはさへたふ  
とさハ、の五句を置  
て、上の高麗人觀相  
の條よ、照をせしめ  
且次の帚木の巻を  
起し伏案と云ふ、  
全部よ、さうりて、  
眼目とさうと云ふ  
の、ひのさうと云ふ詞  
を、さうあつた  
るハ、いさうのハ、  
目さきさつひ  
て、うへりくもたふ  
と云ふ文法さうとい  
ふを、

ひなべてさうびみこさちなごもあつたせ  
む。弘徽殿の  
はくく心くさう思ひすさせめ、  
才五節を叙。弘徽殿の甚く嫉むハ、故ハ、帝  
ハ心を受くべき伏案の才三なり。ハ弘徽殿の恨  
ハ、ハ引つらさハ強ハ。ハ引つらさハ能くせ  
ハ引つらさハ一のみこの女、ハ弘徽殿の女、ハ  
ハ引つらさハ弘徽殿の女、ハ弘徽殿の女、ハ

源氏物語

さうりて

五



さどの不ハ毎巻を  
のふよ於てつふ  
一ざねど先キ一  
をあげてつふ  
巻よ於てハ才二節  
一ざねど先キ一  
なるふよのそのこ  
みこさへうすれぬ  
ひぬとあるハ抑句  
なり是を主客倒置  
法とつふ源ハ主  
一の内子ハ客なり主  
を強く称誉すべき  
所なるを抑ひて唯  
きよき玉のを  
のこまどつふ  
万葉よ白むのこの  
子空穂たぐこそよ  
けひのりかやき  
たも男の同と一の

甚思ひ困る○ざりし曹子。部屋のとるり  
○引へつはし所近き所へ設けたる局  
源氏の書  
此みこい川よなるふよと一  
朱雀院  
一のののすてまるに  
いさをさあどいかに  
せさせはふ。それよつけても世のそ  
いおほれど。みこのあよ  
さる。あうし心む。ありう  
すでみさゆふをえそぬ  
心志を結んか。人も  
ものなりあう。とあ

二号三

けよ引ひのりか  
やうるあと詩よ  
も玉よ譬へたるあ  
にさて才三節よ至  
りて一のみこハ右  
大玉の女侍のおん  
もらよてよせおも  
云くこのおんもほ  
ひよハ有るよふ  
もあうさうけさ  
是揚句なり又この  
きみをたぐこ  
のよあ  
つきのよのり  
一是も揚句なり  
れ一の内子客よ  
さりのふよとひて  
始て源氏(主)を一層  
強く称誉せりさ  
更衣のうつをかけ

ののふ 二小段の才一節なを。源氏のふ  
ハ。朱雀院なり。一の書よあ  
○引へつはし内覧なり。○をさめどの納殿  
を。後涼殿あり。所物を納めあ  
○いみしき。悪しきをいむ。よとよて。若くと  
いふさうり。故に評釈のハリツ。二と傍訓せ  
也。故に評釈も多し。さうして解さべし。○あよ  
さげ。生長なり。○あさき。感歎のさえ。善惡  
ともよ。つよ。あひ入たる。あよ。つふ語なり。故  
所も書中よ多し。以下准らしてさ  
それと一の夜。交の  
づつひて。まあでなんといふを。いふさ  
よゆるさせぬ。と。さうつぬのあつさ  
になさるれば。あめなれて。つふ。つふ。つふ。

源氏物語

まをす

七







つめあふよつて居  
くさうち附して居  
るあふ○別りし  
所答へ○たゆげ保  
ダルサリと云と  
○別りくとはグニ  
ヤくと云○てく  
まのせんじ輩の宣  
旨へ内裡の門の内  
をれをよしてひく  
へ、その車を病者の  
更衣よゆよゆふ  
宣旨へ○別りくと  
てのありのまは  
きいりきたきもの  
ハ命まであること  
と云○別りめくも  
死ぬとも雲と云と  
○別りくはなまけ  
なくと云と云○あ

あうちまぐるほどよるむ。あえむをかひぬる。  
としてなきささげば。市つらひむいとあへなく  
てあへりまありぬ。二小段の才三節なり。是迄  
三節よけてハ。立あへりて。更衣の病床の状を  
説て。まゆく哀きを示せ。こゝは帝の更衣の  
おきを。いと飽る思し召て。何れと契はる  
まふ状ハ。上はさきの世の契もやふのかさけ  
ん。とある照るなり。○此大段中。一小段の才一  
節より。とてきたるきこと。おほくは。あへり  
けなき。心むくのたぐひるき。成たのみよそ  
まへらひ。心むくと。更衣の心中を写し。二小段の  
才二節よけて。くるまのせんト。なるどのた。まをせ  
ても。まよひ。心むく。ささく。ゆさ。せ  
を。と。帝の心中を写したるささく。ハ。ささく。さ  
み。と。その切る情を写し。来るささく。  
き。と。め。心。ま。ひ。さ。さ。く。お。ぼ。め。さ。さ

二号六

えうてぬとて更衣  
の逝去へさしては  
ハ侍使のゆりきて  
の口上の状なり。  
才二大段  
一小節一節  
みこいかくては若  
君をばひのゆりて  
まあへ○別りゆい  
コシナコトノアル時  
かへ○別りさきとほ  
倒のさきさきと云○  
かよごのあんと云  
あゆたは。あふ  
ハ何事かあるなら  
うとも思はずしてあ  
らげ之平氣よてあ  
かふささき○別り  
らぬ人。借らぬ女  
房たちへ○別り  
きとだは大方の相

あふぬささきとなれむ。まのぞのひるんと云。  
市らんぜまは。りぬど。かふるほどよささきひ  
ぬふささきとなれむ。まのぞのひるんと云。  
なよと。あ。あ。ん。た。お。も。は。たらげ。さ。さ。ら。ぬ。人  
ぐのさきさきと云。ハ。市。さ。み。ど。の。ひ。ま。さ。く  
さのれお。ま。ま。を。あ。や。と。み。ま。り。の。さ  
を。さ。さ。き。と。だ。よ。か。さ。さ。く。の。れ。の。さ  
からぬさなれむささきと云。まのぞのひるんと云。  
がひぬ。才二大段一小段の才一節なり。帝若  
帝は悲歎の一なり。○ささく。ささく。ある。を。ま。ひ。  
行文ささく。と。先。さ。さ。く。の。さ。さ。く。の。さ。さ。く。

源氏物語

きりしはが

十



一ノ才三節

心むせほし心ガケ  
或ハキマイちど云  
ト云○引まぞおほ  
一いづる眼目さそ  
帝の衣をたぐひ  
さきゆのどは露愛  
あきしが今あふ  
うぐも何とてやぶ  
んのなき更衣であ  
まゝい悪し人々  
も悔悛あつるさ  
○なかくぞこれ  
引まの奥入ある  
ときありのまき  
ひまよくのりきな  
くそを人の意の  
りたはあはれまは  
うと何と出たる  
當らばとあり

志をわふい。さほ。うらちなごのめが。いりし  
と。心むせほし。あよめや。さく。よ。み。ご。  
の。ま。ご。お。ほ。い。づ。る。さ。ほ。あ。  
き。し。も。て。な。い。ゆ。急。こ。そ。は。あ。さ。う。そ。ね。の。ひ  
し。の。人。が。い。れ。よ。な。さ。け。あ。ま。い。心  
を。う。の。女。房。さ。ご。も。意。志。の。び。あ。へ。り。な。く。え  
ぞ。と。を。か。く。る。を。さ。よ。や。と。み。色。た。り。一ノ才三節の  
さきよは相違更衣を悪し。他の女房更衣ふちもい  
まのさきよはあをれ。とあふ心の出来。高ひ志  
ふさゆ。さて女の心をあさるのなる物。さき  
がよ又あふま。う。の。状。帝。は。慈。愍。の。三。なり。  
そのさく。り。比。さ。さ。後。の。こ。ご。さ。ご。よ。ゆ。こ。ほ

二号八

一ノ才四節

えあさる。う。さ。と。な  
く。え。○。後。の。ま。さ。七  
七日のほろ。さ。と。し  
○。開。の。の。ほ。と  
の。女。房。更。衣。だ。ち  
の。事。へ。は。第。二。あり  
の。ま。と。し。○。引。ま。ぞ  
よ。ひ。ぢ。て。涙。よ。又。レ  
テ。○。割。け。き。と。ま。き  
う。引。ま。ぞ。後。撰。よ  
人。の。い。と。ま。と。ま。と。ま  
さ。さ。さ。の。め。ま。と。ま。れ  
ハ。あ。け。き。秋。も。ま。ま  
ま。ま。と。ま。あり。○。人。の  
む。ね。あ。く。ま。と。う。り  
は。は。は。徽。敏。悪。后。の  
相。ん。後。で。も。胸。が  
ま。れ。ぬ。ま。れ。と。し。ん  
○。引。ま。ぞ。い。な。う

あよとあ。り。せ。め。ふ。ほ。ご。あ。る。ま。ま。よ。せん。あ  
た。さ。う。あ。れ。う。お。や。さ。ま。よ。ま。の。ひ。ご。の。ほ  
と。の。お。な。ご。も。あ。え。て。志。の。さ。さ。た。ぐ。さ。さ。だ。よ  
ひ。ち。て。あ。う。う。さ。せ。め。人。バ。い。て。ま。つ。る  
人。さ。ん。割。け。き。秋。も。ま。ま。と。ま。で。人。の。む。ね  
あ。く。ま。と。う。り。ける。人。の。ほ。お。ゆ。さ。の。れ。と。ご。弘  
徽。敏。さ。ご。ま。は。程。ゆ。う。な。う。の。ひ。け。る。一。の  
ま。を。さ。さ。せ。め。ふ。よ。も。さ。あ。う。や。の。ほ。さ。き  
の。お。ゆ。の。一。あ。つ。く。ま。さ。女。房。は。め。れ。と  
な。ご。を。つ。の。り。ほ。ろ。あ。さ。は。ほ。を。さ。ご。と。め。れ

源氏物語

さきよはが

のうひねさやうそ  
り心あきふふと  
うちとけぬさぬこ  
とさう、

二小ノ才一節

まじり二小段を  
○二のうよまごさ  
むき俄に肌をさ  
○ゆげひの命婦  
買の命婦○やが  
てそのまゝと  
○かうやうの  
をりハ海あそびな  
どかく夕月夜の面  
白くあそぶるを  
○ハ海遊などあ  
りとし○心とる  
る物の心うゝ特  
別さうと云さるゝ衣  
の存在のとき

一小段の才四節。是までを才二大段の一小  
段と見。見をて帝のふく衣をさひひりてな  
ふさまうり。帝は慈歌の四なり。さうこの四の  
所慈歌ハ才四大段の一小段の四の所歡ひと照夜  
の命婦だちて。まのうささむさ夕暮のほご。  
つねよりもおぼりづるとおひくて。ゆげひ  
の命婦といふをつらまら夕づく夜のをさ  
まほごまゝ。たてさせ給ひて。やうてなぶあ  
おら。まま。かうやうのをりハ。海あそびなど  
ささせの。ん。ぶ。さる。物の心をかきさ  
もあさくすえりづるとの禁も人よりりたま  
ア。け。い。う。さ。の。あ。ま。げ。よ。つ。と。そ。ひ。て。  
二九

あひかしてのう  
ささるゝ○やうの  
つらまら引あへ、奥  
入よりをのや  
のうつハさだあ  
なるまゝと  
まゝささるゝ引  
あのとささるゝと  
めづるゝ○けをひ  
衣の里の景況な  
り、

二小ノ才二節

引くろひたて、  
理してん○やまき  
見安きん見苦のあ  
らぬん○やまよく  
れて衣の卒去  
のへる慈傷のあひ  
だよん○やへむく  
ら引あへ新初よと

おぼさるゝもやうのうつらまら。おとおと  
けり。命婦のこままあでつきて。あどひき  
るゝよりけをひあそれさう。二小段の才一節  
あまり。靴負の命婦を勅使とて。衣の亡  
後の宿を訪らちせ。帝は慈歌の餘波。  
やもめをみるれど人ひりのあづきよ  
とらつろひたて。めやまきほとよて。ま  
ぐ。の。へ。る。を。や。ま。よ。く。れ。さ。あ。あ。づ。き。の。ん  
おぼさるゝも。たあくたう。聖かよいとあ  
ね。さ。ら。ち。し。て。月。の。げ。を。あ。り。ぞ。や。へ。む。ぐ  
ら。も。さ。り。づ。さ。入。た。る。み。る。お。の。さ。よ。お

源氏物語

まのうさ







いづれにきこむ。○いづれに  
いづれにきこむ。○いづれに  
家よ居のよも恐多  
きとこととの言こ  
判はとのごゆり  
寝ん命婦ハ若宮  
兄より帝上奏上  
せんと思へどおま  
ハちやう寝のへ  
とさう。

二小ノ才四節

いづれにきこむ。○いづれに  
いづれにきこむ。○いづれに  
心のやみ坪釈の引  
引かとみて指問を  
後撰よ人の親の  
心のやみ坪釈の引  
いづれにきこむ。○いづれに

うみさつてまつり侍る。ちどろちくよ思ひ  
さほをさうしひの。いづれにきこむ。○いづれに  
わさつておらあまのますもいづれにきこむ。○いづれに  
くたどのぬふ命婦いづれにきこむ。○いづれに  
とそまつりてくさういづれにきこむ。○いづれに  
らまほ命婦まぢお命婦ます命婦んを。おまけ  
侍りぬべ二小段の才三節有りとそいづれにきこむ。○いづれに  
せると二なり。交夜の母小の方世をあぢき  
くおもひ命婦ひ命婦ききて。命婦よいづれにきこむ。○いづれに  
くれま命婦いづれにきこむ。○いづれに  
をいづれにきこむ。○いづれに

あるんをとりり○  
いづれにきこむ。○いづれに  
区のまぢのいづれにきこむ。○いづれに  
え、おひを晴らほ  
を、と母よ命婦よ  
いづれにきこむ。○いづれに  
私よ近日内車あ  
れと云。○いづれに  
云、く、を文を  
○いづれにきこむ。○いづれに  
母の涙くるく、交  
衣の小傳め、○お  
ひひくづを、さ思  
ひ屈折るると云、  
心の途中よ折ま

源氏物語

わさつておらあまのますもいづれにきこむ。○いづれに  
くたどのぬふ命婦いづれにきこむ。○いづれに  
とそまつりてくさういづれにきこむ。○いづれに  
らまほ命婦まぢお命婦ます命婦んを。おまけ  
侍りぬべ二小段の才三節有りとそいづれにきこむ。○いづれに  
せると二なり。交夜の母小の方世をあぢき  
くおもひ命婦ひ命婦ききて。命婦よいづれにきこむ。○いづれに  
くれま命婦いづれにきこむ。○いづれに  
をいづれにきこむ。○いづれに

屈するをいさしめ  
ぬん。○たぐりの四  
つぐ。彼の衣大納  
言の建云。○いど  
一たて。所きんよ差  
ぬしたるん。○いよ  
あまのまでの所んぞ  
「過分の所我愛ん  
○人げさきあまのら  
ぬて、人らさきめて  
さよ。逢もぬを云  
○めりつをを」ト見  
エタヂヤモノヲん  
○いよこさまなまや  
うよて「接死のやう  
よてん。○いりさき  
道理なきん。○おも  
ふけぬ。是ハ上の才  
一節よゆづきよの  
とあり。下の才五節よ

しよん。さぎら。たぐあゆのゆびごむをたぐいど。  
とづのりよ。いど。そは。身をあまのま  
での所んぞ。のようげよ。いど。けさきよ。人  
げさきをぢをうん。つ。ま。らひめめめを  
つるを。人のそぬ。あつ。つ。もり。やまのうぬ  
とあわく。なり。そひ。ゆよ。ま。さ。は。なる。やうよ  
て。つひよ。あく。なり。ゆぬれ。あ。り。て。いつ  
くさるん。い。こ。ま。は。心。ぎ。を。忍。ひ。か。ん。ら。れ。ゆ  
る。それも。さ。り。た。ま。ふ。か。や。い。ふ。さ。ん。と。い。ひ。も  
や。い。び。む。せ。あ。り。り。あ。い。ほ。ご。よ。ね。か。ぬ。け。ぬ。二  
小

二号十三

後いさうみけぬれ  
いとあるそ尾なり  
三小ノ才五節  
引くもあつるん。帝  
もを極よぞ思召さ  
るん。とん。○あまの  
うま。き。ぬ。り。更  
衣をえん。と。の。短。き  
あん。○人のうらみ  
をおひ。山。の。後。涼  
殿の衣衣の局を移  
して。恨み。妬。を。受  
け。け。ん。○い。と。く  
人。ら。ろ。さ。マ。ワ。ル  
ク。ん。○い。と。く。さ。よ  
頑。之。愚。痴。よ。ん。○い  
き。の。世。ゆ。う。う。さ。ん  
前世の宿業をらま  
ほ。う。ぞ。あ。ま。の。ん  
○洲。志。存。れ。あ。ち

段の才四節を。おの才身の上を命婦よ。後  
の。か。更。衣。の。里。の。さ。ま。を。叙。せ。る。其。三。才。五。節。  
う。い。も。志。あ。る。ん。命。婦。の。敷。意。を。お。の。才。身。の。上。に。  
人。め。あ。ど。ろ。く。を。あ。り。お。ぼ。さ。れ。い。も。な。ご。の。く。る  
ま。ま。き。ぬ。り。と。い。ま。い。つ。こ。り。け。る。人。の。ち  
ぎ。り。よ。さ。ん。世。よ。い。さ。い。の。も。人。の。心。を。ま。げ。た  
る。こ。い。あ。い。と。お。も。ふ。を。た。ぐ。の。人。ゆ。え。よ。て。  
あ。ま。の。ま。の。ま。の。人。の。う。う。を。お。ひ。い。を。て  
く。い。か。う。う。ち。ま。て。ら。れ。て。ふ。を。さ。め。む。あ。こ。な  
ま。よ。い。と。い。人。ら。ろ。う。う。く。く。さ。よ。さ。り。ま。つ。る  
も。さ。の。世。ゆ。う。う。さ。ん。と。う。ち。あ。い。つ。つ。は

源氏物語

まきまはな

十七



ひとくぐりといひ一  
領之○洲がーあげ  
のてうど所髪結の  
調度之調度ハ道具  
のよえ○肉をひて  
肉裏へ○引ひて  
馴て○引ひて  
く物寂○引ひて  
ハのう誘之○引  
と人ぎううあふ  
甚ダ外聞ワロシト  
○引ひて  
其ダキツカハシウ  
○引ひて  
是ハ上文の事ゆ  
ハを解釈さるるが  
きさるれむ俗名橋  
であらうたデア  
ツタワイ

つらんもひと人ぎううのまづ。まゝこゝたて  
まうで志ぢもあらんハ。いとういあめ  
うあひす匠のひてすおくともえまぬせ  
てまつりまらぬなりけり二小段の才六節  
なり。是までを二  
大段の二小段と命婦更衣の母君と別を  
んとしそのゆの讀まのさゆえ。更衣の里の状  
を叙せる五なり。さかかく命ぬハ。夜ふけぬ  
うちまうりゆらん。とそれどとあくして。別  
を難き状さるハ。女子の苦情故べ。かうやうの巧  
する香つひひとありて。作者の長所と知るべし。  
命婦をまづお母とのこもせとあひさうけ  
るを。あそれよみそまつる。おまへのつばせん  
ざいのいとおもくささのうなるをゆらんぢる

二号十五

三小才一節

つらんもひと人ぎううのまづ。まゝこゝたて  
まうで志ぢもあらんハ。いとういあめ  
うあひす匠のひてすおくともえまぬせ  
てまつりまらぬなりけり二小段の才六節  
なり。是までを二  
大段の二小段と命婦更衣の母君と別を  
んとしそのゆの讀まのさゆえ。更衣の里の状  
を叙せる五なり。さかかく命ぬハ。夜ふけぬ  
うちまうりゆらん。とそれどとあくして。別  
を難き状さるハ。女子の苦情故べ。かうやうの巧  
する香つひひとありて。作者の長所と知るべし。  
命婦をまづお母とのこもせとあひさうけ  
るを。あそれよみそまつる。おまへのつばせん  
ざいのいとおもくささのうなるをゆらんぢる

やうよて。思ひやあよんよく兒のきり。女房  
四五人さあをせめて。ゆものあうりささせ  
ゆめり。たばあけくれゆらんぢる。ちやう  
らんりの急亭子院のうせ給ひて。いせら  
らゆきまませぬ。やうとこのををせも  
ろくのうをを。たぐそのはちをせ。まくら  
よまをせ給ふ三小段の才一節を帝命ぬ  
ちとゆの讀まのさゆえのうけを備ひて。女房た  
あのとをを出したるハ。次の伏案とあたるを  
いこまやあよまをせぬ。あまの  
つると思ひやあよそらす。ゆめりゆらんぢれ

源氏物語

きをけり

此はよおくれれて、追慕する情を写したる詩を、口癖よ志て愛のふとんと、

三小ノ才二節

おとあも侍、物書を下され、五難さん。○あきくみみどりりこち子れよ心か、あれバ、思多しと、○あき風のふぶせぎ、うげとい、衣をりよ、こもぎと、ハ、あきくみみどりのさへ、あきくみみどりをあせぎ、たき、更衣の蔭が、枯てシマウテ、頼ミガ、無クナツタ、シテ、レバ、今ヨリ生長スルマデ、

バ。いよ、あきくみみどりのさへ、あきくみみどりをあせぎ、たき、更衣の蔭が、枯てシマウテ、頼ミガ、無クナツタ、シテ、レバ、今ヨリ生長スルマデ、

あきくみみどりのさへ、あきくみみどりをあせぎ、たき、更衣の蔭が、枯てシマウテ、頼ミガ、無クナツタ、シテ、レバ、今ヨリ生長スルマデ、

このぎのあまのうへガサ案ジラレテ、一寸モ安心ガナイダヤト。○あきくみみどりのさへ、あきくみみどりをあせぎ、たき、更衣の蔭が、枯てシマウテ、頼ミガ、無クナツタ、シテ、レバ、今ヨリ生長スルマデ、

三小ノ才三節

源氏物語

あきくみみどりのさへ、あきくみみどりをあせぎ、たき、更衣の蔭が、枯てシマウテ、頼ミガ、無クナツタ、シテ、レバ、今ヨリ生長スルマデ、

ききり

いのちをくるとお  
もひねんぞあ命長  
クトコラヘテ思ヒ  
テアレト之是ハ母  
君のいのちをささ  
のりとほらふなど  
りくをくを命ぬ  
の中より人をまきこ  
しめての肉羽  
とある抄の説の  
○おき人のまみあ  
ま長恨のゆめ  
照るまて玄宗を使  
をきして揚貴妃を  
訪らひめ志時金  
釵細金の二品を使  
へ博と云故る  
○たぐひりの  
ぼろい幻術を云  
さうもがれい預ひ

まのぬらんとせたまなまのまがひのうづ  
いでふまかん。あふいのうんぎ  
ばとおのぬまもいとあひれ  
尋ねゆくまげらうもがれつてよても玉の  
あまの夜をこと志まぐ。あまあける揚貴妃の  
あまのそいもどき急しといへども。尊のぎり  
ありけれをいとよまひる。大液の芙蓉未央  
の柳もげよのよひたき。うらを。あまめ  
くるよそひいうる。うらを。あまめ。なつ  
みうらうまげらうを。あまめ。うらうま

三号二

の例んがのさい尋  
ねてゆく幻術もア  
リタイモノチヤ人傳  
ニテナリトモ衣表  
ノ魂ノ行キテ在ル  
場所ヲ確ト知ルヤ  
ウニトナリ。○げよ  
あまひたき。あま  
古揚貴妃は似やよ  
ひたるおちん。○柳々  
のくごきまは。おち  
の口ぐせよまひん  
三小ノ才四節  
風のおと虫のひ夏  
ハ上の二小段の才  
六草風いとまじし  
吹てまむの虫の  
了急いとあま照  
るまよ。おのにおも  
ろまよ。おふくま

あまのぬらんとせたまなまのまがひのうづ  
タのよまきまひをまき。えまをまはさむ  
とちぎらせのひま。あれいざりける命の母  
どぞつまきまき。あまき。三小段の才三節。帝  
おまをまきまき。あまき。揚貴妃の例を引く。と  
あま。後の幻の巻の才をまきまき。あまき。あ  
ま。だま。足えまきまき。あまき。あまき。あま  
のそ尾のまき。あまき。あまき。あまき。あま  
を無きまき。あまき。あまき。あまき。あま  
ども。文法の上まき。あまき。あまき。あま  
りまき。あまき。あまき。あまき。あまき。あま  
風のにおと虫のひま。あまき。あまき。あま  
物のおと虫のひま。あまき。あまき。あま

源氏物語

まきまき

二十一

であそびをぞあな  
 ふ弘徽殿ハ更衣の  
 うせのひしをよき  
 更すて月夜は深  
 樂みあふこ○いと  
 とまこころめい事ハ  
 心もさくみのまへ  
 比管絃の音を吹  
 障りよすきのあふ  
 ○引へん殿上人○  
 列さくつりやうし  
 先のどくく○いと  
 おーもちかぢくしき  
 ハナハダ押立才學  
 ラレキ之○めてま  
 一のふフルマヒな  
 ふ○月もりのりぬ  
 一旬も月のおも

おぼさきよよ。弘徽殿よをひさううへの所  
 つらひよも。まうのぼりのり月のおか  
 きよ敷ふくるまで。あそびをぞーのふさる。い  
 とまこころめい事ハ。比管絃の音  
 障りよすきたてまううへ人女房などハ。か  
 ころりつりつり。おーもちかぢく  
 ほどーきおののーのふあうさよて。よもあ  
 らばおぼーけちてわてき。おぼさるる。月  
 かいまぬ。  
 一のうくもさるる。秋の月りあぞ

一ちまよとらふも  
 皆上の二小段の才  
 六節は月ハ入る  
 のを云とある  
 照るさるさるん○  
 型のうくも云とハ  
 意あきけけけ  
 さぢふのやどハ更  
 衣の母の住家をさ  
 せん○とゆへ大を  
 かづげつて長  
 恨歌ハ秋燈挑盡未  
 能眠とあり  
 三小才五節  
 右近のつあきれとの  
 おまう右近衛府  
 の武官の當直の人  
 が名をさるる声  
 ○引は丑刻よん

ちむんあさちふのやど。おぼさるる。月  
 り火をうけはくく。おきおを。ま  
 段の才四節を。おを弘徽殿の女房のさ  
 右近のつあきれとのおまうの急ぎゆる  
 ハ。うよ敷ぬるぬ。人めをおぼして。よ  
 此おとがよりせのくも。まどろませ路とか  
 ち。あーんおきさせふとてあくるも  
 ちとておぼーつるも。おあさまつりど  
 いおとせぬべあめり。ものなごもきこ  
 しめさず。あさがれひのけしきむらうふれさ

○いよりのおとこ寝殿へ○あくるも志らで上よ見えたる長恨の伊勢の家の相よ玉をぞれあくるも志らで福もををさるもみどと思ひあけきやとあるを取れる○あきまつりごとと相政○いよさるまひ朝餉○大床子の所禁中の大床子所の膳へ朝餉ハ女房の陪膳へ大床子ハ殿上人の陪膳○いとさるまきさるまきあれ甚オキノドクヂヤナア○引とら

せうて大床子の所も此れほどいよとをもそのよおほめらればさいぜんよさるまひあざりいんぐさきけりきをみよすつりなげくさるまきさるまきあざりハをよこ女いとさるまきわきあれといひあもせけなげくさるまきさるまきあざりハおそまけめ。そらうの人れそらうみをもげうせのいざこれれよふれよとをばあうををもうなをもせよまひいよまそこあく世のなあのよをもおほさるまきさるまきあざりハをよこ

三号四

のハ許多の人○あうををも道理を失すひある○あうを痛マシキ之師云あうハイタイのイを省けら本居翁タムの意とさるまきさるまきあざりハをよこ○人のみあどのため唐玄宗の相をりさるまきさるまきあざりハをよこ○私云之小声よてものりさるまきさるまきあざりハをよこ

ハ。いとあうさるまきさるまきあざりハをよこ。と人のみあどのためいさるまきさるまきあざりハをよこ。』  
 段の才五節なり。是までを才二大段と云。さるまきさるまきあざりハをよこ。帝更衣のころをさるまきさるまきあざりハをよこ。次段は示せされどやりくさるまきさるまきあざりハをよこ。是以上のり○人のみあどのためいさるまきさるまきあざりハをよこ。一大段の一小段才一節は揚貴妃のためしひきいでつるまきさるまきあざりハをよこ。照應するそ尾之評釈もも揚貴妃のため云々のそ尾を合せて結びたりとあり。今年のを。ほりよりあざりハをよこ。ひぬ。いとこの世の物さるまきさるまきあざりハをよこ。おほめ。あざりハをよこ。の喜坊さるまきさるまきあざりハをよこ。いとひきさるまきさるまきあざりハをよこ。おほせ

源氏物語

まきさるまき

二十三



宮之○ひきこさま  
 行し朱雀院よ越  
 て源氏を坊よせま  
 けし思召之○例  
 うしちみまき人  
 源氏の後見まふ人  
 もさしと之○引の  
 うけひし世人承引  
 ままどと之○引の  
 半  
 分ハと云さ之○引  
 せありありたれど  
 サホドニ思シタレド  
 之○引ぎりしをま  
 げれ制限あれば春  
 宮ハ立かふま  
 と之○引のちろお  
 ちあふぬ弘徽殿の  
 心安堵しとふん  
 一小節二節

ど。はうしちみまき人もさく。まのうけ  
 ひくまじきとさねば。おのあやうくおぼしは  
 ばありて。おまもつごせ給をばなりぬるを。  
 さまありおぼしたれど。まぎらうをありけれ。  
 と世の人もす正弘徽殿女所もはころおちるぬ  
 才三大段の一小段才一節。ま君を考客よと  
 おほせせど。世のす正を憐りて。一の客を立めふ状  
 之。才三大段ハ。三小段九節まで。まぐてままの上  
 の事を叙したる。お。尾は履壺の本傳を添へり。  
 あの所おをまきこの方。さぐさむうこさくおぼ  
 しとづて。おまさん所よだよまづひゆるん  
 と福がひのひしとまじや。つひようせ給ひ

三号五

おまきこのは祖母  
 小の方之、更衣の母  
 のこと○引せ給ひ  
 ぬれど死まふ  
 之○引のたびにお  
 ぼしありて更衣の  
 薨去のときハ、何  
 も知りぬぬま君  
 していつと○引こ  
 ろ言祖母の心を  
 おしもうりて事の  
 のまふ之○引ま  
 又の源氏の若君  
 今より内裡よの  
 こるまふ  
 一小節三節  
 小の源氏の何よ  
 も敏く候くま

ぬれを。帝源氏  
 みる。みとむつよなまふふ年なぬを。このび  
 ハおぼしありて。こひるげきまふ祖母の心  
 れむつびす正給へるを。えなりおくのるひ  
 をさんかへ給くのひるる。今ハうちよの  
 さまひ給ひ一小段の才二節。祖母うせぬ  
 又女所もみ心おちぬひぬとあるハ。弘徽殿  
 の嫉妬の落らぐ一。女所よひて。更衣の  
 母小の方死去まふ。弘徽殿の嫉妬ハ。ま  
 幾かあり落らぐ。是は嫉妬の落らぐ二なり。  
 つよなりぬ。ハ。おまもつごせ給ひ  
 のひて。世よまじきとさく。まのうけ  
 ひくまじきとさねば。おのあやうくおぼしは  
 ばありて。おまもつごせ給をばなりぬるを。  
 さまありおぼしたれど。まぎらうをありけれ。  
 と世の人もす正弘徽殿女所もはころおちるぬ  
 才三大段の一小段才一節。ま君を考客よと  
 おほせせど。世のす正を憐りて。一の客を立めふ状  
 之。才三大段ハ。三小段九節まで。まぐてままの上  
 の事を叙したる。お。尾は履壺の本傳を添へり。  
 あの所おをまきこの方。さぐさむうこさくおぼ  
 しとづて。おまさん所よだよまづひゆるん  
 と福がひのひしとまじや。つひようせ給ひ

源氏物語

まをまふ

二十四





てはる藤人が観おの  
のまむおとせり  
すえひろごりて  
○おほいさうごひ  
て二條の右大臣并  
よみ徽殿をのり  
心よのり春宮を  
立ちのりふもや  
とらふごひごり  
ひのふさゆん

二小ノオ二節

やまときさるる多国の  
観相をよみくまへん  
をりあへ○おほい  
よきよらるるさるる  
王よていあへん  
とあひよきよらるる  
お人ハまことよあへ  
このりらるるお人の  
りよ所希のみ心と

符合してあれは、宣  
よ賢こしと思ひ合  
せのふん○無親  
王のお威のよせまき  
よていたるよはさ  
ト皇子の童解よて  
親王宣下あるハ大  
あへ無ふごお威ハ  
母うごごいせまき  
よていたるよはさ  
よの寄モナキ無品  
の親まよしと漂蕩  
ハしつゝあへん  
之是ハ一のみこを  
右大臣の女侍の  
腕よてしつゝあへ  
して云るり○た  
人ハ臣下と○い  
つよみちくごごま  
逾道々の秀才と○

源氏物語

はりき。おのづのうとひろごりて。もさせ  
わりのほど。春宮のおほちおとご。なとりのさる  
とよあとおほいさうごひてなんありらる。二  
段のオ一節。高藤人の観相の状を叙したる  
ハ。はあ君後よ太上天皇とあひ伏案。評釈  
云初は容貌のめでたきをりひ。次よ才徳のい  
ときをりひ。茲よあひて一世の吉凶をとこねるハ  
伴文の法。これより下の詩文のよ。此のよ  
ほひよかきそりて。源氏の秀才をほめたる  
みあといさきほらよ。やまときさるるを相ほを  
おほいよりよけるまぢるれば。いさうでこの  
まことよみらるるまぢるるをさうけるを。お人  
ハまことよのりこまをりらるとおほいあをを

三号ハ

て無親王のお威のよせまきよてまあは  
はまごごの法せらりともさうめまきをたご人  
よておほいさうごひをさるる人けさ  
きよあのもげなるよとおほいさうめていよ  
いよみちくごごまをさるるいさせぬまきいよ  
あへんたご人いよあへんけれど  
みことよりよひるご。世のうごあひおひるひ  
ぬぐごものごんが。はるえうのあへんこさた  
の人よ。かんごくさせぬふら。おほいさうご  
せば。源氏よさるるまぢるるご。おほいあを

源氏物語

いふとあらうけれども  
 甚惜しけれども○ま  
 くえうのうらさき  
 乃の人よ宿曜之星  
 取りの道の上手の  
 人よ○おれどさ  
 またまうせおん  
 と同様よ申せば  
 ○おれおきてた  
 りありや定め  
 ありとおきて  
 判の字なり

てたれ』二小段の身二節也。若君の才能ありて  
きを見そなひて。帝一世の源氏よな  
しぬるとおぼはれ。是迄を弟三大段の二  
小段とれ。若君の後よ太上天皇と成りて伏案  
年月よそく。おれのみん  
 やまおのしとておれしとて  
 るをさる。なぐさむやとさるづき人を  
 まあせのへど。おぼさるるるどた  
 りもあさきせられ。ととほしうのともうけ  
 よおぼしなをぬる。先帝の四乃孝の所ある  
 ちきざれさるるさきえさくおり。母  
四君の母先帝の后  
 きさるるよなく。づきさえのみを。うつよ  
 さあ。内侍のまけハ。先帝は此時の人よて。

三号九

うきものともろよ  
 つけてうとみるこ  
 ○引へよさあ  
 内侍のまけ上侍の  
 女官よて典侍之。は  
 人よ三代の朝よみ  
 やづあへてある  
 状○引まほの  
 たて中つり今もチ  
 ラトガラキハ見た  
 て中つり○引よ  
 うおぼえて。甚しく  
 更衣よぬつるとこ  
 ○ありあさきあ  
 ち申れなうウツクシ  
 キ内あさちの人と  
 ○おんころよゆえ  
 させ四のまの申入  
 内の子をぬんころ  
 はやさせあ

母后のまほ志しうまありされたりけれど。  
四君  
 いまけさくおら。時よりみさるる  
典侍  
 り。いまも河のそそまらるるせ。ひ  
三君  
 やまおのしとてちあ。娘くる人を三代の  
 やづあへよつさるるぬるよ。えみまりつけ  
四君  
 ぬよ。ささいのまのひめあさる。いとさうおぼ  
 えそおひいでさせさるりけれ。ありあさるあ  
帝の  
 ちあびとよたんとさるりける。まもよやと  
 所ららとさるてぬんころよきさえさせ娘  
三小段の身一節也。人々帝を慰めなむら  
 ひらる。んとおひ講る。是より後垂のしを叙れ

源氏物語

さるるは

二十八

三小段二節

春多の女師は徹殿  
性悪しき人○著はナ  
ニデモナク○ハ  
さしつゝシウ○ハ  
がまがーうも○ま  
まも○引くろけを  
きさゆまて母を  
ひめれを若壺の  
ふげをき○おふ  
らぬ人々○若壺  
の方とは人々  
くくははるのんた  
ち及び所兄の兵部  
々も若壺は入内を  
はくめめふさま  
若壺やうやく入内  
うふさまふかき

若壺の母后の侍  
とまごのさくしてまうつがの更衣のあはれよは  
あはれむてなまれたあしもゆりうとあ  
ほつてうてすあぐあうもあがたささ  
けるほごよまき死もうせぬふぼを死さゆ  
まておひしますよたが女ここちとお  
なづつよ思ひ夢正人といと秘んごろよま  
こえさせぬふさあぬ人○若の後人  
内せうとの兵部々乃みとたどかくふぼそく  
ておひしますんよりえうちずとさせぬて  
入内

三号十

さたり○引は  
のちありさまは  
げはハ上の典侍の  
奏聞したる初をう  
けてげよと云○  
引れハ人の所きハ  
まさりて若壺ハ身  
かも勝りて○引  
ひを○世の人の思  
あふ○引けりて  
あふぬとさ○受張  
又承諾なり人も承  
諾して不足するも  
さ○引は  
まがーうも○ま  
をひひて更衣のみ  
をまがれまき  
よいあ○と自  
らみんうつ○  
引まき○無比○又

若の母后の侍  
はくめめふさま  
若壺やうやく入内  
うふさまふかき  
若の母后の侍  
とまごのさくしてまうつがの更衣のあはれよは  
あはれむてなまれたあしもゆりうとあ  
ほつてうてすあぐあうもあがたささ  
けるほごよまき死もうせぬふぼを死さゆ  
まておひしますよたが女ここちとお  
なづつよ思ひ夢正人といと秘んごろよま  
こえさせぬふさあぬ人○若の後人  
内せうとの兵部々乃みとたどかくふぼそく  
ておひしますんよりえうちずとさせぬて  
入内

源氏物語

三小段の二節

二十九

三小、才三節

此うへさきん、  
源氏のまを、  
氏とあれが既ニ姓  
を賜りたるさあ  
○志げく、  
供にて源氏もたび  
たび泣くせのよ女  
供衣だち○  
あくよつとめでた  
けれど女帝更衣何  
まも羨慕ナレド  
○うちおとさび、  
の人、ハ大人ブリ  
かふよ○せちほ  
切りよ○  
らりよ○  
漏レテ茶壺を源氏  
がえのめとむ状

源氏のまを、  
げく、  
いづれの、  
いゝるやハある。と、  
うちおとさび、  
しげよて。さちよ、  
りみしてまつる。  
ほえの、  
けの、  
れと思ひ、

○おづさひ、  
とく又、  
むつ、  
と、  
と源氏、  
も帝の、  
と、  
き、  
を、  
め、  
たり、  
リ、  
あ、  
子、  
ら、  
こ、  
の、  
源、  
ち、

さづさひ、  
もあ、  
そあ、  
るあ、  
き、  
て、  
け、  
み、  
よ、  
御、

源氏物語

○それはくさき爪に  
之交際のと立ちて  
睦まうらぬと云う  
ちそへて云うは徹夜  
ハ着壺よそへて深  
氏をもさみみくち  
○かのいとおぼ  
たは「氣障」おぼ  
三小ノ才四第  
まななくひる山帝  
のふら着壺を無比  
とあるへる○か  
ほよほいさハ云  
ヤツハリ着壺は  
くくくても源氏の  
羨望するれと○周  
おぼえもとりぐる  
れ比帝の御愛と  
ちろくちとともな  
けれを

ちそへてもとより此  
のいとおぼたは三  
さうと云ふとちあ  
段才三第おぼえは  
いとあそれとあひ  
のちのまきれの出  
まななくひるいと  
うおハする壺のち  
さはととへんあこ  
のひとひある君と  
おぼえもとりぐる  
ゆ曲 三小段の才  
小段と云ふは源氏  
おぼえもとりぐる  
さうと云ふとちあ  
段才三第おぼえは  
いとあそれとあひ  
のちのまきれの出  
まななくひるいと  
うおハする壺のち  
さはととへんあこ  
のひとひある君と  
おぼえもとりぐる

三十一

○これはくさき爪に  
之交際のと立ちて  
睦まうらぬと云う  
ちそへて云うは徹夜  
ハ着壺よそへて深  
氏をもさみみくち  
○かのいとおぼ  
たは「氣障」おぼ  
三小ノ才四第  
まななくひる山帝  
のふら着壺を無比  
とあるへる○か  
ほよほいさハ云  
ヤツハリ着壺は  
くくくても源氏の  
羨望するれと○周  
おぼえもとりぐる  
れ比帝の御愛と  
ちろくちとともな  
けれを

つひ。着壺を櫛。日の  
眼目さう。女段も帝  
さまを叙し。終りよ  
おぼえもとりぐる  
さうと云ふとちあ  
段才三第おぼえは  
いとあそれとあひ  
のちのまきれの出  
まななくひるいと  
うおハする壺のち  
さはととへんあこ  
のひとひある君と  
おぼえもとりぐる  
ゆ曲 三小段の才  
小段と云ふは源氏  
おぼえもとりぐる

源氏物語

源氏物語

三十一



きやうるど所くの  
 養膳之〇引つたの  
 さ内藏寮之〇引く  
 さう池穀倉院之〇  
 湖ろその疎畧之〇  
 けりてきおほせと  
 りて特別に勅命あ  
 りて

一少才二節  
 ひんがしのひさし  
 東庇之〇引つたて  
 て侍子を立てん〇  
 くさぎ冠者之〇ひ  
 きりれのあまに〇加  
 冠の大臣之〇周  
 帝の侍まへ〇み  
 つゆひさし〇髪  
 へんツラ之〇つら  
 つき類ツキ之〇み  
 ほのよほひ類の艶

う池など。おほやけとよつこのうまのれる。ある  
 そのなるともうそ。ととらきおほせとあそ。  
 きしを流くして。つううまのれり。一少段の  
 身一節の  
 身十二歳よなをひぬれを。所元服の  
 りき。その扱けの状え。られ帝所缺ひの  
 おほまの殿のひんがしのひさし。東向よ所  
 へたせ。くさぎの所産ひきりれのおとぶの  
 所産所あよ所り。さるの時よぞ源氏すありな  
 ふ。みつゆひさし。つう流き。あやのよほひ。  
 さはあんのんを上げ。大蔵くく人つ  
 ううまの。つうきよなる所く。をそく原

〇さまのひのり  
 形のカユラシサニ容  
 を替のふいぎき  
 〇くく理髪の人  
 〇くくのなきを  
 タマリカヌルヲ之  
 〇おんトあんさせ  
 のふコラヘカヘシ  
 のふ〇〇引うぶ  
 〇ひて加冠し五  
 ヒテ之〇みやまみ  
 とらる所休息所之  
 〇所をたてまつり  
 あんて侍衣を召  
 替て之〇おほて堂  
 下より下りて帝を拜  
 のふ〇〇みのと  
 もは帝モ又之〇前  
 のとよりあへし昔

どくもげなを。うくくは所のみま  
 しのばとおほり。くくを。くく  
 〇おんトあんさせのふ。つうぶりのて。は  
 さまとらよまのて強ひて。所をたてまつりあ  
 つて。おほておほり。あは。皆人を。お  
 〇のふ。みのと。ま。てえ志のびあへのを  
 ず。おほ。ま。を。を。昔の  
 りあ。怒。おほ。い。か。き。び。口。あ  
 る。ほ。い。あ。げ。お。り。や。と。う。い。く。お。ほ  
 され。を。あ。ま。う。う。ま。け。を。ひ。ん。が。り





之、一つ后後の云々  
○つづつてよつて  
も中のあややあ左  
大臣殿もかたぐ二付テ  
キラくシト状之○割  
さの御座がよと朱  
雀院の侍外祖父之  
弘徽殿ノ侍父右大臣  
殿之○割されつて  
歴之○引く人の少御  
後又政中おと云人之  
○右のおとくの中  
云く四の五よあま  
左大臣と右大臣の御  
中ハよのうと云く右大  
臣の女四の五を左  
大臣の男よ記とせま  
ふ之○割と云く左  
大臣の孫を引つづ  
は方らば右大臣ハ

よ世中を去りぬる右大臣おとくのほりきほ  
ひい。ゆのよもあはれおきれさなり。ゆ子ども  
あまこもいづよゆの娘ふ葵の母をやのほりい  
くく人の少将をとりとさうををりき現。右  
のおとく此中中右つとよつねど。えいさぐ  
しりぞ。しづきさふ四の君よあをせをり。  
源氏源氏方らば  
おとくはあはれほりき  
あまひどもよをり一小段の才四節之。引入  
るハ葵上を源氏へあせたるおよ。かく由お  
をくハしと云く。先述を三大段の一小段とん  
源氏の君をうへつひよめ百纏中つをせを。心や

四号一

源人の少おをり  
づく之○割と云は  
しきほあまひども  
アリタキは間之是ハ  
左右大臣の御交際  
ハかくむたきとと  
地より評して云之  
二小、才一節  
心やさくさくさみ  
源ハ容易よ左大臣  
方へ出出さき之○  
おのいとの大殿之  
大臣の家をきて  
大臣と云之○割と  
さきほむのひとへ  
心と云く源の幼く  
して物をたぐ一筋よ  
あふ心より苦き近  
る壺を志す

さくさとさみもえし後りず。心のうちよハた  
いあぢつほのあありさほをたぐひさしと思  
ひす。えてさやうな人をもををみあさもも  
のなぐもおをりけるこれおのいとあ。えい  
とをりしげよしづられたる人とはみゆれ  
ど。いよもつのおおほえめをささきほむの  
ひとへ心よかりて。いよもつ。現すぞおを  
しける。二小段の才一節之。源氏ハ母を慕ひな  
る。初めハ容貌の似するとすて  
る壺をあつみさひし。今ハそれのささき  
意慕ひのさみ。かみを源氏の侍ハを叙せし  
おとくよなりゆそのちハ。あましやうよさす

源氏物語

きりし

三十五





